

加古川市近郊でウラギンスジヒョウモンの食草：アリアケスミレを確認

島崎 正美¹⁾・島崎 能子²⁾

ウラギンスジヒョウモン (*Argyrozone laodice japonica* 絶滅危惧Ⅱ類：以下本種)の幼虫の自然状態での食餌植物(以下食草)としてフモトスミレ、タチツボスミレ、オオタチツボスミレ、ツボスミレ、スミレなどが確認されている(福田ら, 1983; 白水隆, 2006)が、兵庫県内ではスミレ科植物の種名が確認できていなかった(広畑・近藤, 2007)。筆者らは、2008年から加古川市近郊で本種の生態観察を継続し、5月下旬に発生する第一化が7月上旬まで活動して、夏眠のあと9月下旬から10月下旬まで再活動するとの成虫の年間目撃記録を報告している(島崎, 2010)。その後の2017年の9月まで飛翔中、休息中あるいは花蜜を求める成虫を見る以外の知見がなかったが、2017年10月、加古川市平荘町の休耕田でメスが産卵をする場面に初めて遭遇した。翌2018年、越冬後に成虫した幼虫の観察が期待できる時期を5月頃だと推定し、同地で食痕のある食草を目印

として探索した結果、アリアケスミレの根元近くに潜む中齢幼虫(図1)を発見できた。数日後には終齢となった幼虫が実際に摂食している場面の記録(図2)もとれ、アリアケスミレ(図3)が本種の幼虫の食草となっていることを明らかにできたので報告する。

本種の第一化が発生する時期には、加古川市近郊の田畑および丘陵地周辺の草地を飛び回るオス、灌木地帯の植物葉上で休息するオス、雨上がりの路面で吸汁するオス(図4)などが観察でき、特に、畑地周辺の草むらで探雌飛翔を繰り返すオスを目にする機会が多いがメスの観察機会はきわめて少ない(図5)。

交尾に関しては1993年6月16日に加西市での観察例が唯一の公式データ(広畑・近藤, 2007)で、未発表データとしては2018年6月に「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」代表の竹内隆氏が加古川市内で初めて交尾個体を目撃され、画像記録がとれている未発表例として2015年6月20日、同ネット会員である星盛隆氏による小野市での撮影記録(図6)がある。

本種は卵または初齢幼虫の状態越冬することが知られていて、夏眠前に産卵する可能性は低いと考えられるが、実際、5-7月に産卵行動は観察されていない。

夏眠あけの秋にはセイタカアワダチソウの花蜜を求める個体(図7)を見る機会が多く、5-7月に比べるとメスの目撃例も少なくない。

初めて産卵行動を観察できたのは2017年10月30日、セイタカアワダチソウが群生する加古川市平荘町の



図1 アリアケスミレの根元に潜む中齢幼虫。



図2 アリアケスミレを摂食する幼虫。



図3 アリアケスミレ。

¹⁾ Masami SHIMAZAKI ; ²⁾ Yoshiko SHIMAZAKI 兵庫県高砂市



図4 雨上がりの路面で吸汁するオス.



図5 ササの葉にとまるメス.



図6 交尾. 星盛隆氏撮影.



図7 セイタカアワダチソウの花蜜を求める個体.

休耕田でその花蜜を求めるメスの動きを観察していた際、吸蜜していた花から離れて草地の低い部分を飛ぶようになり、ときには枯れ草が交錯する部分に潜り込むような態勢で産卵し始めた。驚かさないように一連の挙動を追い続けてその撮影記録をとった(図8)。地面を覆う枯れ草部分や明らかに食草ではない植物周りに次々と産みつけていく様子を記録したあと、その映像を手がかりに卵を探したが卵の確認はできなかった。

産卵行動を観察した休耕田一帯にアリアケスミレ以外のスミレ科植物がないことから幼虫の食草を特定できる可能性が高いと考え、越冬後の幼虫の成育度合いを推定して2018年5月4日に現地を訪ずれ、メスが産卵をしていた場所一帯でアリアケスミレの周辺を調べた。食痕のある株を目印として探し続け、深い草むらに埋まるアリアケスミレの根元近くに潜む中齢幼虫1個体(体長15mm)を発見できた(図1)。この位置に目印をつけて5月9日に再訪問し、終齢となった幼虫(体長28mm)がアリアケスミレを摂食している場面も撮影記録できた(図2)。この記録は本種の幼虫がアリアケスミレを食草としていること確かな証拠となる。その後、5月12, 15日に幼虫を探したが発見できなかった。

次いで、自然状態での蛹化の実態を知る目的で5月19, 24日に深く茂った草原を調べたが蛹は発見できず、29日には休耕田の柿や梅の果樹がある部分で草刈りがされていた。根こそぎの除草状況から幼虫や蛹が犠牲になった可能性が考えられたが、ヒメジョオンとアカツメ

クサの花が多く咲く深い草むらは残っていて、これらの花蜜を求めて飛び交う本種のオス2個体を観察でき(図9)、この場所で無事に発生した個体だと推定した。6月1日には休耕田へと踏み込む道路沿いのアカツメクサの群落がすべて刈り取られていたが、ヒメジョオンとアカツメクサの花が多い深い草むら領域は残っていて本種のオスによる探雌飛翔が観察できた。6月4日は3日前と同じ状態で、メスがそのあたりで羽化することを期待するかのように柿の木の根元陰部分を探るなどのオスの探雌飛翔(図10)や同じ個体がアカツメクサに立ち寄り吸蜜する様子を観察できたが、メスの姿は見られなかった。

6月4日の訪問時には、休耕田の地主さんがこの場所を果樹園として維持する考えで、現在の花が咲く領域は草むら状態が続くことがわかり、本種の今後の生息維持が期待できた。加古川市近郊には本種の発生が推定できる地域が他にも複数あり、タチツボスミレなどが自生しているところもある。今後は上記休耕田の状況を継続的に観察するだけでなく、他の地域においても秋のメス個体の挙動を注意深く観察し、スミレ科植物に対する本種幼虫の食性を明らかにしたい。

最後に、本種の交尾記録について加古川市での目撃情報を知らせて下さった竹内隆氏、小野市における交尾記録の情報を提供して下さい画像の採用に同意して下さい星盛隆氏に感謝いたします。



図8 産卵行動を示す.

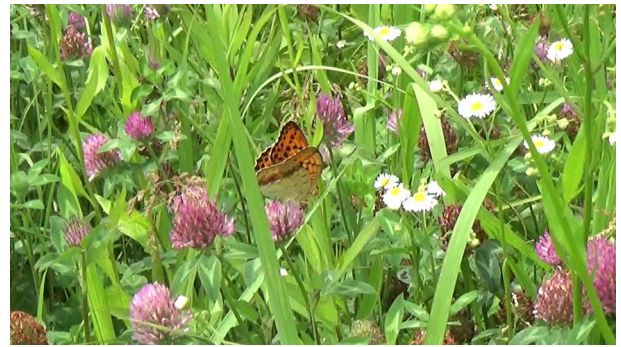


図9 アカツメクサの花蜜を求める個体.



図10 探雌飛翔をするオス.

参考文献

- 島崎正美, 2015, きべりはむし, 38(1): 4-5.
福田晴夫ほか, 1983, 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ).
325pp, p. 83, 保育社, 東京
広畑政巳, 近藤伸一, 2007. 兵庫県の蝶. 330pp, p.171,
岩峯社, 東京
島崎正美, 2010. 加古川の蝶: 年間発生状況. きべりは
むし, 32(2): 12-14.
白水隆, 2006, 日本産蝶類標準図鑑, 336pp, p.213-214,
学研, 東京